

5. 参加者からカナダ側参加者への京都大学・日本の農林水産業・京都の紹介

5. 1 京都大学の紹介(発表スライドは P67 を参照)

藤盛瑤子、小谷麻菜美

藤森と小谷は京都大学を紹介するプレゼンテーションを行い、以下のようなことを説明した。

京都大学は 1897 年に日本で第二番目の大学として設立された。当初から学生の自主性を重んじる自由の学風のもと研究、教育が行われた。設立時は工学部と理学部の 2 の学部だけであったが、現在では総合人間学部、文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、薬学部、医学部、工学部、農学部の 10 の学部から成る。ちなみに、農学部が設置されたのは 1923 年のことである。農学部については、さらに 6 つの学科分かれており、資源生物科学科、応用生命科学科、地域環境工学科、食料環境経済学科、森林科学科、食品生物科学科がある。現在、大学全体で学生数は約 22,800 人、留学生は約 1,500 人、教員は約 5,400 人である。留学生の数は年々増加している。さて、京都大学にはさまざまなキャンパスがある。時計台とクスノキで有名な本部キャンパス、理学部と農学部がある北部キャンパス、さらに、霊長類研究所など多くの研究施設がある。また、11 月には学園祭である 11 月祭が開催され、模擬店やパフォーマンスで非常に盛り上がる。

人前でプレゼンテーションをするのはとても久しぶりだった上、英語でプレゼンテーションするのは初めてのことだったので緊張したが、スライドを終えた後、京都大学への留学、留学生の出身国についての質問が出て、京都大学に興味を持ってくれたのだと感じ、うれしかった。また、文学部 (Faculty of Letters) とはどのようなことを勉強するところか、という質問が出て、文学や歴史、哲学について勉強するところであると説明した。日本では文学部はメジャーな学部であるが、カナダではそのようなくくりの学部があまりないのだろうかと思い、その文化の違いに興味深く感じた。

ところで、カナダで行った全てのプレゼンテーションを行って私が感じたことは、カナダの学生は非常によく質問するということである。私が小学校、中学校、高校で行ってきたプレゼンテーションでは、発表するだけで質問をしたり、それに答えたりということはあまりなかった。しかし、カナダの学生はとても自然に質問をしていた。私はこのことから、発表してそれで終わりではなく、相手の質問に答えてはじめて相手に情報をきちんと伝えられるのだと感じた。

5. 2 日本の農林水産業の紹介(発表スライドは P70 を参照)

三谷太郎、栗田一平、盤若明日香、樋口裕磨

発表は、まず三谷が日本の農林水産業について述べた後、他の三人がそれぞれ定めた自らのトピックについて紹介する、という形がとられた。これは、日本の農林水産業のおおまかなイメージを持ってもらうだけでなく、彼らの知的好奇心を刺激し、何か興味を持ってもらう事を意図したためである。実際、20分の中に、バラエティ豊かな内容を用意し、紹介することが出来た。以下に概要を記す。

1、日本の農林水産業の概観（三谷）

日本の豊かな自然の恵みとその活用を自ら生涯をかけて撮り集めた写真で効果的に示すと同時に現在抱える就労人口などの問題についてもグラフで分かりやすく提示。

2、果物・牧畜（樋口）

果物では、庶民に生活の中で広く親しまれている柿やイチゴを中心に紹介する一方で、牧畜では、政府の牛肉に対する姿勢や斬新な取り組み等をアピールした。

3、野菜の活用・栽培（栗田）

この狭い国土においては、野菜に関わらず、栽培法の工夫は重要な課題である。その様子をテクノロジーと伝統手法の双方から切り込んだ。また、日本特有のゴボウ・焼酎などの説明も聴衆を惹きつけた。

4、杉花粉（盤若）

日本で猛烈に花粉を振りまき、人々を悩ませるスギ。しかし、花粉症というのは日本独特の病らしい。カナディアン達はその苦しみを理解する事は難しいだろうが切実に伝えてみた。

私たちは、日本の農林水産業をカナダの学生たちに少しでもわかりやすく伝えるため、日本とカナダでの違いを意識しながらプレゼンの作成に取り組んだ。農業は今回の実習のテーマであったので、少しプレッシャーがかかった。私は特に、一回生だったため、プレゼン作成自体が初めてでわからないことだらけだった上に、英語で必要な情報を捜し、調べ、スライドを作るという作業は、きわめて困難であった。四回生の三谷さんを中心にプレゼンの発表までに、何度も集まり、打ち合わせをした。学科も回生もばらばらで予定を合わせるのも大変だったが、今思えば、殆ど初対面の人ばかりの今回の研修が始まる前に少しでも話せるような間柄になっていたのはよかったように思う。本番の発表では、まだそれほど仲良くなる前のカナダの学生、先生方に向かってプレゼンをするのだが、自分の英語が伝わるのか、質問にちゃんと答えられるかなど考えてしまい、とても緊張した。プレゼン中のカナダ人学生たちの、熱心にノートを取り、質問してくる態度には、とても感銘を受けた。発表が終わると、あなたのプレゼン良かったよ。と、声をかけてもらっている人もいた。すごくいい雰囲気だな、と思った。学生同士が、お互いの発表に関心を持ち、納得するまで議論をする文化は、本当に素晴らしいと思った。学ぶことがたくさんあった。

5. 3 京都の紹介(発表スライドは P82 を参照)

池田千紘、榎木裕里、伊原嶺、伊達慶明

「京都の基本データ」「京都の歴史」「観光名所」「京都の食文化」という4つの観点から、カナダの学生にとって「京都入門」なる紹介プレゼンテーションを行いました。

1、京都の基本データ

京都の地理や人口などの統計的情報といった、まずは京都とはどのようなところなのかを説明した上で、京都の美しい四季の移り変わりの様子など、京都についてまず知ってほしいことを紹介しました。同じ賀茂川で撮影された四季の風景の写真はやはり美しいと感じました。

2、京都の歴史

平安時代から明治時代までの京都の歴史を、京都の主要な名所の写真や、昔の服装や伝統的な祭りの様子など文化的な要素を織り交ぜて紹介しました。写真や絵を多用した視覚的に訴える発表で、時代の変遷を京都になじみのない人にもわかりやすく伝えており、また茶道や浴衣など、発表者自身が実際に文化に触れている写真は、カナダの学生たちに好評でした。

3、観光名所

金閣寺・銀閣寺・清水寺に京都駅ビルと、京都定番の観光名所4ヵ所を選んで、それぞれの造られた背景なども含め、紹介しました。京都といえばお寺や神社など、古い歴史的建造物ばかりが強調されて取り上げられがちですが、現代的な名所も紹介していた点も良かったのではないかと思います。

4、京都の食文化

京都は四方を山に囲まれ、海に面していないという地理的要因から独特な食文化が形成されたことを中心として、京料理の食材の特色から和菓子・現代的な「スイーツ」にいたるまで広く紹介しました。京都の料理＝日本の伝統料理というイメージが強いですが、京都ならではの特徴を知ってもらえたのではないかと思います。

6. 毎日の記録

8月23日（1日目）

アルバータ大学 General Science Building の講義室にて、ツアーの説明を受けた後、京都大学およびアルバータ大学の学生、スタッフの自己紹介を行った。その後、少人数のグループに分かれ、アルバータ大学の学生の引率によりキャンパス内を見学した。学生らは広大な敷地や美しく修景されたキャンパスに感心し、キャンパス内にリスやウサギが生息していることに驚いていた。キャンパス内には、さまざまな店の入っているモールや、キャンパスに直結している地下鉄があり、利便性が高められていた。アルバータ大学からは、大学のロゴ入りの上着のプレゼントがあった。アルバータ大学附属植物園 (Devonian Botanical Garden) へは、2台の大型バンに分乗して向かった。昼食は、サンドイッチ、果物、クッキーなどであった。現地は、日本の気温と比べるとはるかに寒く、プレゼントとしてもらった上着がさっそく役立った。



写真 倉庫に保管されている農業用大型機械（保管のために両翼が折りたたまれている。カナダでは普通のサイズ。）

午後は、日本庭園と、熱帯植物やチョウ類が飼育されている温室、植物園を見学した。日本庭園は、池泉回遊式であり、現地の素材（石や樹木など）をうまく使って設計されていた。和風の建物があり、会議等に利用されているとのことであった。日本人の造園家が施工を管理したとのことであったが、流れの石の配置は、現地風であり、アルバータ地方の造園技術を読み取ることのできるよい機会であった。植物園は広大であり、さまざまな樹木や草花、農作物が集められていた。一般の来園者も大勢来ており、展示方法に工夫が凝らされていた。ボランティアの力も借りながら、比較的少人数で植物園の維持管理を行っているとのことであった。

夕方には、小麦やカノーラ(アブラナ)を生産する農家を見学した。大型の機材を用いて、約4,000 エーカーの土地で生産しており、近年、農地を拡大したとのことであった。その後、North Saskatchewan River の支流の White Mud River 沿いのハイキングコースを散策した。ビーバーがダムを作るために倒した木の株跡や、キツツキが腐朽木内の虫を採食した跡などを観察しながら、1時間ほど散策した。夕食は、アルバータ大学の学生やスタッフとともにとった。以降の日も含め、ツアー中の食事代は、アルコール類を除き、すべてアルバータ大学の費用でまかなわれた。

(農学研究科森林科学専攻 助教 今西純一)

8月24日(2日目)

午前9時から、アルバータ大学の研究室を、2コース(土壌学、作物栽培学)に分かれて見学した。土壌学関連の研究室を見学するコースでは、アルバータ州に分布する各種土壌のモニリス(土壌断面標本)を見ながら、土壌の特徴や成因を学習した。その後、土壌微生物や土壌化学の実験室、分析室を見学し、研究内容や機材の説明を受けた。分析機器を動かすための専門のスタッフが常駐し、高価な機材を使った分析や技術を必要とする分析を請け負っているとのことであった。



写真 七面鳥の飼育ゲージ

午前10時30分から、京都大学の学生によるプレゼンテーションが行われた。学生は3つのグループに分かれ、あらかじめ準備していた日本の農林水産業や京都の文化、京都大学に関する紹介を行った。アルバータ大学の学生は熱心に聞き入り、質問をしていた。

午後から、有機肉生産業者(Sunworks Farm)を見学した。2台の大型バンに分乗し、目的地へと向かった。移動時間は約1時間で、昼食は車中ですませた。Sunworks Farmは有機飼育の規定に従って、鶏、七面鳥などの生産が行っており、蓄舎の衛生状態や温湿度の管理、有機飼料の入手と配合、使用する水の質などに、特に気を配っているとのことであった。管理状況は綿密に記録され、管理にフィードバックされていた。生産された肉はアルバータ州内のファーマーズ・マーケットにて販売されておりカナダではこのような有機肉の需要が高いとの話であった。

夕方からは、歓迎会(レセプション)がアルバータ大学のFaculty Clubにて行われた。カナダ政府やアルバータ大学の本ツアーの支援者が多数集まった。代表者らの挨拶の後、関係者は、両大学の学生とともに、ビュッフェスタイルの夕食をとり、意見交換を行った。

(農学研究科森林科学専攻 助教 今西純一)

8月25日（3日目）

三日目が始まった。今日は、車に乗って牧場に向かった。車の中で、自分ができ限りの英語を使ってコミュニケーションをとった。アルバータ大学の学生は、英語が不得意な僕にも熱心に親切に教えてもらった。牧場は僕が思っていたものとは違ってかなり広大な牧場だった。この牧場では単に牛を育てて出荷するのではなく、牛の糞や小麦を使ってエタノールを精製し、最先端の発電も行っていた。ガイドの説明が速くて聞き取りにくい部分もたくさんあったが、アルバータ大学の学生が、難しい説明を簡潔にまとめて教えてくれた。環境破壊や地球温暖化への配慮がところどころに見られて僕はとても安心した。



この後いつものサンドイッチを食べて、カナダの国立公園に向かった。カナダの国立公園では、バッファローの飼育も行われていた。僕が見て一番驚いたのは、バッファローの治療や検査のために使う檻だ。この檻は電動式で非常に効率よくバッファローの治療や検査ができるよう考慮して作られていた。その後国立公園の散策エリアでしばらく歩き回ったが、辺りにバイソンの糞が落ちていることから、この散策エリアにもバイソンがいることは確認できたが実際に確認できなかったのが非常に残念だった。散策エリアを歩き回り、大学に戻って今晚のことと明日のことを話し合った後、日本の学生とアルバータ大学の学生でカナダで一番大きいショッピングモールに向かった。そのショッピングモールは中にスケート場やジェットコースターやプールまであり、日本のものとはかけ離れていた。売っているものはそう日本と変わらなかったが、その大きさにただただ驚愕した。そして一日が終わり部屋に戻ると非常に疲れていたのかいつのまにか寝てしまった。



（農学部資源生物科学科 2回生 伊原嶺）

8月26日（4日目）

4日目ともなると、ドーナツとコーヒーという朝食のスタイルにも慣れ、スムーズに支度を済ませることができるようになっていた。バンの中でのアルバータ大学の学生との会話も徐々にラリーが続くようになったのには、自分でも驚いた。

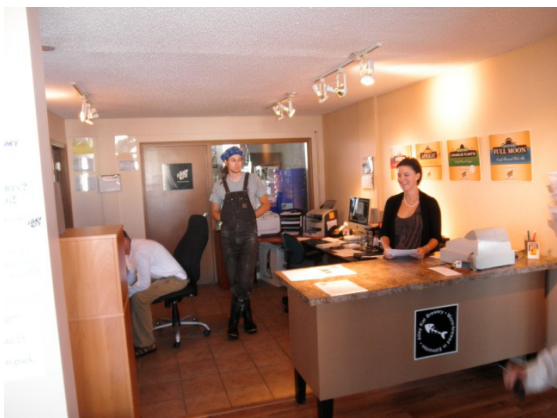
今日は見学に行く場所が多く、1ヶ所目は大学内にある研究施設へと足を運んだ。印象としては、非常に大きく、施設内も整備されていて、クリーンな環境であると感じた。見た目だけでなく、研究内容も非常に最先端で、多くの研究者達が集められ、情報を共有しているという所にその理由を感じた。キャノーラの研究は、実際にキャノーラを見たからか、具体的に理解することができた。日本とは違い、産学連携の形がしっかりしているので、新しい機械の導入や研究費などの資金面や、特許の取得などによって技術をお金に買えるというビジネスの面において充実しているということが分かり、日本のこれからの発展のきっかけをつかんだような気がした。



2ヶ所目は、カナダで流行しつつある、Community Supported Agriculture (コミュニティーが支える農業)を実践する農場を訪れた。日本には、「むら」意識に根付いた日本的なコミュニティーというものは存在していたが、この農場の場合は、都市部の人たちと農場の人たちとの間で、コミュニティーの形がとられていることが大きな違いだ。都市部の人たちは農家の人たちに資金的な援助をして、農家の人たちの経営面での不安(豊作の年の価格の低下や不作の年の収入の低下など)を解消し、逆に農家の人たちは都市部の人たちに新鮮な野菜を提供するだけでなく、農作業の体験の場を提供し、それぞれにメリットのある、非常に先進的なコミュニティーであるといえる。日本ではどうしても1次産業とその他の産業を分けて考えがちだが、それらが提携を結ぶことで、双方にメリットを作り出せるということは、これからの農業や林業などにとって、非常に参考になると思う。また、農場の作物は非常に新鮮で、特にきゅうりとズッキーニは非常においしかったのも印象的であった。植物工場での栽培も流行しつつあるが、自然の中で食べる野菜というのは格別な部分があるというのは、不思議である。



最後に向かったのは、ビール工場であった。ビール工場というと、とても大きなものを想像していたが、実際に行ってみると非常にこじんまりとしているというのが正直な感想だった。しかし、工場内を見学するとその理由はすぐに分かり、質の高いビールを管理するためには、徹底的な検査が必要であり、それらを実行するためには必要十分な大きさであった。試飲では6種類のビールを飲ませてもらったが、どれも味に特徴があり、ブランドがつくだけのビールであると感じた。



夕食後には、明日からの移動に備え、セーターを購入しにモールへと連れて行ってもらった。非常に寒いとのことであるが、なかなか来られないカナダであるから、カナダの気候まで楽しみたいと思う。

(農学部地域環境工学科 2回生 栗田一平)

8月27日(5日目)



最初に行った Agriculture and Agri-Food Canada で、最初に見たものは、牛、バイソン、鹿等の解体、精肉施設だった。実際の解体現場などを見ることはできなかったし、おそらく日本の工程とあまり変わらないだろうが、写真でかなり迫真に迫るものを感じられた。最近では、スーパーでは年中同じ野菜を見ることができ、例えば大根が冬になるものと知らない人や、イチゴが冬にできるものと思っ

ている人が多く存在し、しかもそんな人が農学部に入っている。ひどいものになると、実際に見かけたことはないが、都市部育ちで魚をスーパーでしか見たことがないために、切り身の状態で魚が泳いでいると思っている人までいるらしい。自分は今までそういった人たちを心の奥底では馬鹿にしていたが、今回のことで自分もあまり、生産の場を知ってはいなかったことを思い知らされた。思うに、今の日本人が食べ物をあまりにも粗末にするのは、経済の発展などの云々よりも、こういった実態を知らない状況にあるのかもしれない。ある程度、生産者やその生産過程が身近に感じられる環境を作ってやることが日本に必要なのかもしれない。次に見たものは、精肉された肉の品質や、その変化、また pH などによる外的条件とその関係を調べる施設であった。こういったものはおそらく日本の施設にも、精肉所と併設されているかどうかはわからないが、あると思う。だが、この施設には学生がいた。これはおそらく日本ではあまり一般的でない。例えば、理化学研究所に大学生が研修しに行くことはおそらく滅多にない。日本にも人材育成のためにはある程度オープンにすることは悪いことではないと思うし、若い人の発想を取り入れることには大きな意義があるように感じる。



その後、Field Crop Development Centreを見学した。ここでは、おもに品質の向上などの研究を行っている。これは、カナダでは画期的なことだそうだ。なぜなら、これまでカナダでは、品種改良と言えば、耐病性や収量の拡大をおもにやっていたためだ。日本では、国土の狭さのために、収量で勝負できないので、品質をとにかく上げて単価を上げることでしか周りに対抗できない。そのため、その手の研究は盛んで、進んでいるように感じる。カナダの農場などと提携して、品質のよいものを大量生産し、それを日本に輸出するなどといった。ギブアンドテイクをするのもよいのではないかと感じた。



その後

車で移動し、最後に Whelp Creek Watershed の Beneficial Management Practices について見学した。ここでは、水路を上手に調整し、柵などで、家畜をコントロールすることで、牧畜と栽培を同じ水で両立させることに挑戦している。そのために、水質の調査を毎二時間ごとに調べていた。いちいち現場に行かなくてもいいように、サンプリングが自動化してあり、その結果が携帯やパソコンに送られるようになっていた。

日本では、水質の調査を政府にまかせっきりなところがあるように感じる節がある。牧畜のみの農家も栽培だけの農家も、こういった意識を少しもつことも大事なのではないだろうか。水質が変われば農作物に直接影響が出るのは当然だが、見た目にはあまり分からなくても、人間に何か影響があるかもしれない。そういったリスク回避も兼ねることができ、非常に効率的であると感じた。カナダの広大さの利点と欠点とを両方に感じられる一日だったと思う。



(農学部応用生命科学科 1回生 伊達慶明)

8月28日（6日目）

今日は午前中、4時間かけてカナダを南にひた走る。海外渡航が初めての自分にとって、見渡す限りの大地、どこまでも見える空（日本では山が視界を遮る）や氷河が削ってきた壮大な地形など、全てのものが感性に訴えかけてくれるようであった。



昼過ぎて着いた先は、牧草地を育成している広大な土地であった。この牧草地というのは、放牧を希望する業者に貸すためのものであるらしい。そこの経営者であり、今回の見学のガイドを務めてくれた方は、「収入が低いとはいえ安定して得られるため、リスクが少ない」と述べていた。また、この辺りは雨が少ないのだが、灌漑システムを開拓することで、エリアの中の比較的水の多い場所から水を引いてきている。これからも更にそのシステムは向上していくようだ。同様に改善されていくのが、動物の管理用フェンスについてである。牧場の牧草や植生自体はほとんど自然に任せているのであるが、動物達をフェンスによってコントロールすることで、よりよい効率性に結びつけている。



さて、ここまで牧草地の概観を述べてきたが、ここからは紀行文として実感したことを中心に綴っていくこととしよう。ゲートや、灌漑用のポンプを離れるにつれて、人の匂いのするものも次第に消えていくかのようにであった。車はどこぞの遊園地のアトラクションのように、揺れに揺れた。道なき道に行く、というのはまさにこの事か。多彩な動物達が自分達を出迎える。青さぎ、ペリカン、水面を走るかのように飛ぶ鳥など、鳥類が目立った。湖の近くでは、鹿の足跡を発見した。水を飲みに来たときのものらしい。植生も様々。低木が小さな茂みのように点々とあり、牧草もさわさわと風になびいていた。ある場所では、牛がのそりと道をあけるの待たなければならなかった。経営者の基地に戻ると、羊達（これは人為的に生息している動物）がすぐ脇で戯れていた。なんと、この放牧エリアには、212種もの生物が存在するという。自分達が触れる事のできたものは、ほんの一部に過ぎなかった。日本でも、古くからの山里など農の中で育まれる自然がある。その豊かさは、スケールこそカナダより小さいとしても、決して負けていないと思う。しかし、日本では今、農業離れが進んでいる。それが単に食料自給率の面でマイナスだとかいうだけではなく、その独自の生態系まで失うということを、思い出させる内容となった。

（工学部地球工学科 1回生 樋口裕磨）

8月29日（7日目）

Brooks の Ramada Hotel を9時に出発し Dinosaur Provincial Park に向かった。エドモントンを離れてから3日経ち疲れが溜まってきたということに加えカナダの広い農地の風景にも慣れてきたということもあり、バンの中で睡魔に襲われかけていたところに、今まで見たことのない個性的な地形が視界に入り込んできた。いくつものおにぎり形をした山々が連なり地層が幾重にも堆積した跡が見られ、日本では決して見ることのできないその景色に眠気も忘れシャッターを何度も切った。



写真 見慣れたカナダの広い風景



写真 見たことのない個性的な地形

Dinosaur Provincial Park では午前と午後でそれぞれ1つずつのプログラムが用意されていた。午前は恐竜の化石が多く見つかったエリアでのバスツアーに参加し、午後は Cottonwood (ハコヤナギ) の再生に関するレクチャーを実際にトレイルを歩きながら受けた。



写真 ビジターセンター内部



写真 バスツアー用バス

ここ Dinosaur Provincial Park は世界遺産にも登録されている自然公園であり、登録理由として豊富な恐竜の化石・独特な地形・動植物の3つがある。バスツアーの中では4つ目の隠れた理由としてラクダの形をした岩も紹介されていた。(このラクダの形をした岩の写真が UNESCO に提出した報告書に載せられていたそうだ。)このバスツアーには研究以外の目的では立ち入ることのできない地域で行われるという大きな特徴がある。ガイドの質も高く、日本の自然公園ではまず体験できない内容だった。この地域が保護されている理由から化石の findings 方掘り方、そして先住民の思いまで、五感を最大限に活用して吸収し、2時間という時間があっという間に過ぎた。



写真 バスツアーの様子



写真 発掘作業体験の様子

Cottonwood の再生に関するレクチャーも大量の蚊に刺されたことも含め多くのことを学ぶことができた。カナダの自然公園は国営造物公園であり日本の自然公園の地域制公園とは異なるものではあるが、質の高い体験を提供しようとする姿勢(特に有料のバスツアーのような利用者のニーズに合わせたプログラム等)は日本の自然公園でも学ぶべきものであると感じた。レクチャーの後、2時間の車での移動を経て Lethbridge のホテルに到着、ホテルのレストランで夕食をとった。写真 レクチャーの様子



(農学部食料・環境経済学科 4回生 三谷太郎)

8月30日（8日目）

早朝 8:15 に集合して、地域の Irrigation を管理する組織でプレゼンテーションを聞いた。訪問したのは St. Mary River Irrigation District というところである。Irrigation 自体はカナダでもそう珍しいことでもないのだが、この地域は特に乾燥が激しく耕作に向かない土地であったので、開発の当初から政府の援助を受けて移住者たちが組織的な Irrigation を行ってきたという。アルバータ州では6月から7月にかけて集中的な降水があるが、作物の生育期はその次の時期なので、地理的な配分だけでなく季節的にも必要な時期に必要なだけ水を配分するためにも、Irrigation が必要なのである。水資源はかなりきちんと管理されている。貯水池 (reservoir) に流れ込む水量はセンサーでモニタリングされており、利用する水の量は常に適正になるように水門の開閉によって調整される。各農地に配分する水の量も、この地域の Irrigation を管理する組織の認可を得た上で決定され、その範囲内で利用しなくてはならない。この Irrigation を管理している組織は、この地域の人々が民間で運営しているものであるが、日本にも似たような組織はあっても、水量のモニタリングからリモートセンシングによる農地管理まで、ここまで手の込んだ管理方法を導入している組織は珍しい。この District のような水資源の限られた地域では、それほど水の配分は重要な問題なのだろう。古今東西、水利というのは人間の暮らしに直結するから様々な争いの種になってきたものである。実際に水を引いて利用している field を見学させてもらったが、教科書に載っていた航空写真でしか見たことがなかったセンターピボットがあまりにも大きいので本当にこんなに大きな機械が動くのだろうかと思うほどだった。実際一周させるのに、大きなものでは二日ほどかかるらしい。



写真 センターピボット



写真 灌漑用水

(農学部資源生物科学科 3回生 藤盛瑤子)

8月31日（9日目）

キャンモアで朝全員集合した。カナダは日本の秋くらいの気候だと聞いていたが、真冬並みの寒さに感じた。カナダ人が防寒着を余分に持ってきてくれたものを借りて、各自一生懸命着こんで出発した。ルイーズ湖までの道のりでは、車の近くに山が迫ってきて驚いた。8月であるにもかかわらず、連なる山々は白く、ところどころ霧がかかっている。ロッキー山脈の山並みは地層が露出していて、小学校で習った断層の授業を思い出した。車に乗り込んでから1時間ほどでルイーズ湖に到着した。ルイーズ湖の水はびっくりするほど鮮やかなターコイズブルーだった。この辺りの湖は氷河が動くときに地面や岩石をけずることによってできたので、水にミネラルや鉱物が溶け込んで青や緑に見えるそうだ。ルイーズ湖のそばの陸地には大小様々の岩石や丸太、木のくずなどが堆積していた。この地形は、氷河が運んできたもので、モレーンといわれるらしい。



その後、氷河センターに向かった。氷河センターで昼食をとり、展示コーナーを見学した後、いざ氷河の先端へ。先端までの道のりは、風が非常に強く、細かい氷の粒が顔に吹きつけてきて息をするのもつらいほどだった。氷河は近年溶け続けていて、100年後の氷河センターのあたりは、氷河がなくなり湖になって、木が生えて緑が増え、今とは全く違う地形になるのではないかと予想されている。氷河が溶けるスピードは地球温暖化に伴って、加速し続けている。私は今しか見られないこの景色を目に焼き付けようと、必死に目をこらして、きらきらと光る氷河を眺めていた。



そして、ヒントンに出発。車内ではカナダ人学生と宗教の話になった。彼は、プロテスタントのクリスチャンだそうだ。彼はキリスト教に対して自分の考え方をしっかりと持っていて、私ができるようにゆっくりと自分の考えを説明してくれた。同じ年頃なのに、そのはっきりと意見を言える姿勢に私は感動した。私自身は何の宗教なのかと聞かれて、私は宗教をもっていないがキリスト教の中高に通っていたので中高時代は毎日礼拝をしていた、と話す、なんでキリスト教に入らないのか、と聞かれて私は何と答えたらいいのかわからず、言葉に詰まってしまった。私のつたない英語で必死に、日本人はほとんどの人が特定の宗教をもっていないことや、クリスチャンでなくてもクリスマスをお祝いすることや、神道でなくても初詣に行くことなどを説明したが、彼がこの感覚を理解してくれたかどうかはわからない。

ヒントンではアルバータ大の森林実習中の学生たちと一緒にバーベキューをした。たき火を囲んでみんな歓談したり木をくべたりギターを弾いたり歌を歌ったり、映画の中のような光景だった。私はカナダに来たばかりだという中国人留学生とカナダの話をしたり、一緒に旅をしてきたキャロラインと友達やこの研修で感じたことなどについて話をした。夜、宿泊先に戻ってから三谷さんの誕生日会をした。カナダ人学生たちがアイスクリームを買ってきてくれた。三谷さんはとてもうれしそうだった。その後、フーズボールやビリヤード、ポーカーなどのゲームをカナダ人、日本人、教授、学生たちが入り混じって楽しんだ。

この1日でカナダの広大な自然を体感することができておもしろかった。また、違う言語、違う文化の中で育っても、同じことに興味を持ったり、同じことに悩んだりすることもあるのだということに気づかされた。カナダで出会った人々から学んだことをこれからどう活かしていくのが、今の私の課題である。

(農学部食品生物科学科 3回生 榎木裕里)

9月1日（10日目）

朝起きると、雨が降っており、その気温の低さに驚いた。アルバータ大学の学生によると、今年のカナダの夏は寒いそうだ。耳の調子がおかしいのは標高の違いのせいであろうか。Hinton の地域を体で感じる事ができた。朝食はビュッフェ形式のものであった。そのビュッフェで今日の昼食も詰めた。

バンに乗り込み、山火事の監視を行っているセンターに行った。そこで、はじめに安全ベルトの付け方を教わった。そこにはたくさんの消火道具や消防服が置かれてあった。その後、練習のためのタワーへ行き、上がり方、降り方を習った。安全ベルトをつけてタワーに登るなどという経験は今までなかったため、緊張した。

その後再びバンに乗り込み、20分ぐらい走り、山の上の高い所にあるタワーへと向かった。到着すると、2匹の犬が出迎えてくれた。そこにはセンターのような建物があり、ここでいろいろな調査をしているのだろうか、と思った。高い所に来たので、気温はさらに低くなった。すぐに、カウボーイの恰好をした男性の担当者が現れた。カナダでは、農場や畜産場へ行った時など、カウボーイの恰好をした人をよく見る。カウボーイは映画の中の人だと思っていたので、実際に見ることができ、カナダの文化を学ぶことができて非常に有益であった。

ついにタワーに登る時がきた。無心で登った。そして、タワーの上での景色はかなり良かった。今までに見たことのない程の木の数だった。しかし、天気の良い日だと、もっと良い景色が見られるらしい。晴れていたらもっと良かったのにも思ったが、雨でも十分見ごたえのある景色だった。タワーの上には、ギターやオーディオやたくさんのCDが置いてあった。タワーでの長時間滞在用に使うようだ。



写真 タワーと住居



写真 カウボーイの恰好をした担当者



写真 タワーを下から見た図

担当者の話によると、私がセンターだと思った所に、彼は奥さんと二人で住んでいるということであった。時期によってさまざまだが、山火事の多い7～8月は2時間おきにタワーに登って監視するらしい。彼によってこの辺りの山は守られているのだなあと思った。

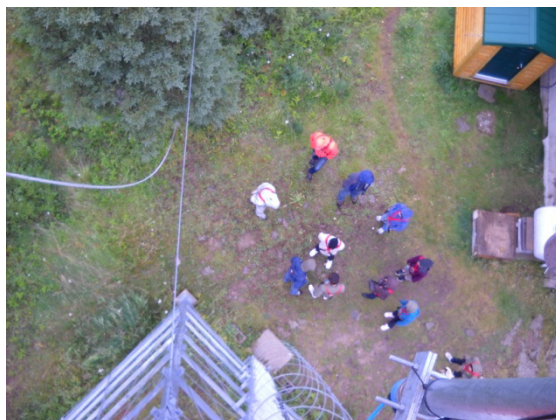


写真 タワーの上から見た図(みんな安全ベルトを装着している)

その後、Hinton に戻って昼食をとり、バンに乗り込み、Edmonton に戻った。Edmonton に戻るとかなり暖かくなった。夕食はベトナム料理であった。今日もカナダについて多くを学ぶことができた。



写真 終了時のレクチャーの様子



写真 ベトナム料理

(農学部資源生物科学科 1 回生 小谷麻菜美)

9月2日（11日目）

今日は、昨日までの実習で学んだ内容を6つのテーマにわけてプレゼンテーションの形でまとめ、発表することで、実習の総まとめを行った。テーマは 1) Local food systems、2) Innovative agricultural waste management、3) Adding value to agricultural products、4) Role of scientific research、5) Conservation issues in agriculture、6) Irrigated agriculture の6つである。

午前中は準備のためフリー、午後1時から4時ごろまで教室にてプレゼンテーションという流れだった。プレゼンテーションはアルバータ大学の学生と京都大学の学生の混ざった2、3人の班でひとつのテーマに関して行うよう振り分けられ、協力して最後のまとめができるようになっていた。今回は、この授業が単位認定されるのがアルバータ大学の学生のみであったということで、プレゼンの準備は主にアルバータの学生側が進めるようにとの指示が出された。アルバータの学生達は一晩で案を考え、次の日の午前中のみでプレゼンが完成するよう準備をしてきており、この準備の速さは見習わなくては、と感じた。もちろん京都大学の学生も発表準備から英語の発表も共に協力して行い、ともにひとつの発表を作り上げた。私の班は、朝の8時半に集まり大学の購買と学食の合体したようなSUBという建物のソファ席でプレゼンについての話し合いを行った。この発表準備作業の中でも、アルバータ大の学生達は、作業が効率よく進まなくなるのにも関わらず、私達に実習で学んだ内容について理解の足りない点についてはわかりやすく噛み砕いて説明してくれた。一方で、このようにすることで、アルバータの学生側も学んだ内容について説明できるまでに理解できている必要があるものであり、彼ら自身の理解を深めることにもおおいに役立っていたのではないかと感じる。

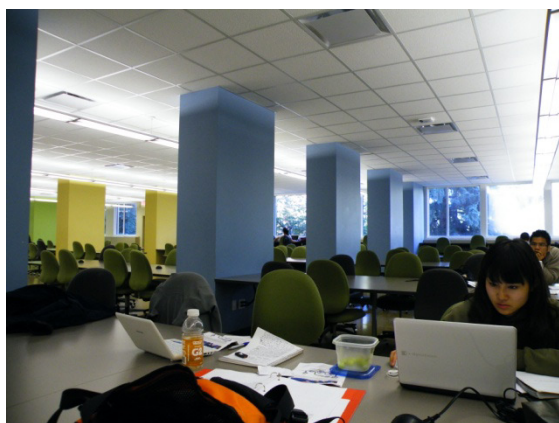


写真 準備の様子



写真 SUBの様子

プレゼンの発表は形式には規定がなく、Creative であることを第一に求められた。実際の発表では、パワーポイントのみならず、歌・パペット劇・寸劇(衣装や麦などの小道具の使用)・日本語表現・写真や絵と、本当に様々な表現方法が見られた。また日本との比較をすることで考察した班が多かった。カナダの学生の発表の仕方は日本人の控えめな発表とは異なる点も多く、非常に参考になった。前日までの実習をほぼ半日でまとめ、さらに他の人にも伝えられるかたちにまでもって行くのは難しいのではないかと思っただが、なんとか発表を切り抜けることができ、皆ほっとしているようだった。



写真 プレゼンテーションの様子

プレゼンの後の夕飯は、アルバータ側の学生の一人の Darren が全員を家に招待してくれ、BBQを兼ねたホームパーティーをして、皆で交流を深めた。途中、サルサを教わりに行くグループと家に残るグループにわかれ、カナダのパーティーの雰囲気に触れ、それぞれ楽しいひとときを過ごした。



写真 ホームパーティーの様子



写真 サルサバーにて

(農学部森林科学科 3 回生 池田千紘)

9月3日（12日目）

今日はカナダのクラスメイトと過ごせる最終日だった。二週間の研修は思っていた以上にあっという間に過ぎてしまい、もう最終日なのかと思うとなんだかとても寂しい気持ちで朝を迎えた。カナダに来てから、楽しいけれども毎日スケジュールがいっぱいで寝不足の生活が続いていた。今日は現地で初めての昼集合で、昼までぐっすり寝るという選択肢もあったけれど日本に帰ってからも寝ることができると思い、池田さんと朝からエドモントンの町を散策しに出かけた。エドモントンに到着した初日も大学周辺を歩き回ったのだが、その時はマップ片手に右も左もわからないまま野生のウサギや、ただただ大きい建物、自動車やひと気のまったくない通りなどすべてに驚きながら、散歩したのがとても懐かしく、今では二週間という短い期間だったけれど愛着のわいた通りを見納めだと思いながら歩いた。いつもバンで出かけるのとは違う道で川沿いまで来たのだが、エドモントンの小さな町といっても知らないものがたくさんあって、もっとこの町について知りたかったという思いがこみ上げてきた。明日帰らないといけないということがものすごく寂しく感じられた。川を渡ると州議事堂があった。やはり、敷地や建物の大きさがとても大きく、また、原色でとても鮮やかな色の花々がたくさんうえられていてとても美しかった。その後、建物の中を少しだけのぞかせてもらい、美しさ広さに感動しながら、たくさん写真を撮って帰った。



昼からはダウンタウン、アートギャラリー、ウォーターパークに出かけるという選択肢があった。私はウォーターパークに出かけた。プールはショッピングモールの中に存在し、まずそれだけで驚きなのだが、スライダーが日本のものとはぜんぜん違って驚いた。特にほぼ垂直に10メートルくらい落ちるスライダーを見たときは唖然とした。また一定の間隔で巨大な波が押し寄せるプールもあったが、奥にいくほど深く、気づけば足が届かなくなって、水着の上から T シャツを着ていたせいもあって、濡れそうになった。途中で自分が一番小さいことに気づいたが、みんながどんどん足の届かない奥へ行ってしまっているので、このとき初めてもっと身長がほしいと思った。平気で1メートル70~80センチの深さのプールが存在するんだとあらためて文化の違いのようなものを感じた。体力が擦り切れそうになるくらい楽しんで満喫して帰った。晩御飯は Arshad 先生とも合流しておしゃれなお店でディナーを楽しんだ。おながが空いていたせいもあってとても美味しかった。その後、Arshad 先生とお別れをし、Chase とお別れをして Caroline の彼氏のバーに行った。みんな Chase との別れがとても悲しそうだった。バーは今まで行った中で一番大きかった気がした。大音量で音楽が流れ、大きなスクリーンがあらゆる場所にあり、ダンスを楽しんでいる人もいた。十分楽しんだ後、Jennine、Brett、とそして最後には Caroline、Darren、Ryan とお別れのときがやってきた。みんなそれぞれにいろんな思い出があり、別れは本当に悲しかった。来年の五月に是非とも全員で日本に来てもらいたいと強く強く思った。一人ずつ写真を取り合い、バーを後にした。



最後に、私はこの実習に参加できてとても幸せだった。普通の旅行ではできないような現地の大学生との交流、様々な経験ができて文化の差異、考え方の違いなどいろいろな発見があり、得られたものは大きかったように思う。私にとって一生忘れられない思い出となった。先輩に一言言うとしたら、私は一回生だが受験以来ほとんど英語の勉強をしないままこの実習を迎えてしまったことをとても後悔した。もっと聞きたら、もっと話せたらと思う部分がたくさんあった。今からもっと英語の勉強をしてリベンジしたい位だ。このプログラムを組んでくださった Arshad 先生、遠藤先生、同行して下さった Miles、Chokri、Scott、今西先生、渡辺先生、ドライバーの Jocelyn、Jennine、プログラムに参加した学生みんなに感謝したい。

(農学部森林科学科 1 回生 盤若明日香)